熊本・徳永直の会会報
第４５号

寒風のなか
第二十五回孟宗忌終わる

立ちどまってみれば四半世紀が過ぎていた。孟宗忌は二十五回を挙行し、本会報は四十五号を出すに至った。文学碑の行く末は未だに不安定であるが、熊本市が「文学碑の森公園」として一帯を買い上げてくれることを切望するばかりである。近ごろ会う人会う人から「文学碑はどうなりましたか」と聞かれる。私はうれしくなる。徳永直文学碑に関心を持っておられる人々が確かにふえたのだ。文学碑所在地域の町内会の皆さんのご協力は、頼もしく、うれしい。地域を核に据えた文化運動は本質的で力強い。熊本市白川左岸の向山地区では、石光真清の生家保存を中心に、向山校区歴史文化保存運動が、地元のエネルギーを結集しつつ展開されている。新町の地域興しは久しいし、先日は上熊本駅周辺地域が、バンド演奏などで「身近に漱石を」と盛り上がりを見せた。そこでは第二弾として小泉八雲の「停車場で」の作品朗読なども計画中とか。熊本は動き出すと底力を発揮する。昨年発足し、今春会報「草枕」を発行した「くまもと漱石倶楽部」にしても、層の厚さが感じられる。文化的不毛と陰口たたく筋もあるが、熊本市という自治体は、文学ないし文化関連の記念館を九つも擁しているのである。全国でも類を見ない数ではなかろうか。これに「文学碑の森公園」でも加われば、文化都市熊本は堂々と全国に打って出ることができる。

徳永直文学碑は死守しなければいけない。今回の移転騒動を福に転じさせ、輝かしい文化都市熊本の一つのシンボルともなる「文学碑の森公園」の実現を、黒髪地域の皆さんとともに推進させたいものである。多くの熊本市民の皆さんのご支援をお願いしたい。（中村）

第25回孟宗忌に集まった人々

プロの朗読に感動　―偲ぶ会―

岩本　税

朗読会会場（くすの木会館ホール）

去る二月十一日、孟宗忌偲ぶ会を熊本大学のくすの木会館で行った。開演を前にして中村会長から直作品の読書会を始めたとの報告。つづいて矢部絹子さんら元・現職アナウンサー数名による朗読会があり、リアルで迫力ある実演に聴衆は魅せられた。『太陽のない街』の一節・「婦人部会」の部分だけだったが、組合会議で「性」を問題として論ずる場面だった。

偲ぶ会に参加した二十数名が、一人ひとりの自己紹介で、徳永直とのかかわりや近況報告を行いこれも有意義だった。特に画家の宮崎静夫氏が「……シベリア抑留から生命がけで引揚げ、その後も悲惨な生活を乗りこえて今日の自分が存在する……」と、しんみりと話されたことばが忘れられない。

読書会は、原則として毎月第二土曜日の午後二時から、事務局（南風堂隣りの「漱雲」）にて行うことになった。次回からテキストは『最初の記憶』を使用する。徳永の郷土熊本の作品であり、孟宗忌の名称の一つともなった孟宗竹から竹柄杓や竹箸などを作って売る若き日の直の生活である。とっつき易い作品ですので多数の参加を期待します。テキストは事務局にて用意します。

第二十五回孟宗忌のことなど

杉野　健一

企業閉鎖・リストラの嵐が吹き荒れ、弱者にのみ更に痛みが求められ、真新しい日の丸がへんぽんとひるがえっているのは、高利貸のビルの上だ。戦後民主主義の空洞化がすすむなか、戦争をしない国から戦争をする国へと加速が強まっている。戦前の歴史に似てきていると感じられるような緊迫した状況のなかで、第二十五回孟宗忌が開かれた。

この日本で、唯ひとつの徳永直文学の顕彰を発信する、わが熊本徳永直の会も、高齢化にともない櫛の歯が欠けるように、年々歳歳

参加者が減少していく。思うに、労働者出身であり、熱く労働について語り、信頼をこめて「あたりまえ」の労働者の群像を、巧みに心血をそそぎ書き続けた数少ない作家徳永直の孟宗忌に、若き労働者の姿を見ないのは、軋るようなかなしみであり、残念である。それに致命的なのは、現在容易に作品が手に入らないということだ。わが熊本徳永直の会の急務は、徳永直選集の出版と、ひとつひとつの作品に即した地道な研究と普及ではないだろうか。

文字通りささやかな集まりではあったが、メーンの熊本朗読研究会の「太陽のない街」の一節（３婦人部会）の六人による群読は、活字で読みとる感動以上に、作品のもつ光沢を立体的に浮彫にし、迫真のみずみずしい感動を与えてくれた。

今日、現実をみすえ格闘している労働者作家たちの低迷が指摘されて久しい。徳永直の残した文学的遺産は、今日的リアリティを保っているし、ずっしりと重い。

孟宗忌に想う

寺澤孝子

二月十一日第二五回「孟宗忌」当日、好天には恵まれたものの早春の冷たい風が吹き、これでは碑前祭への出足が鈍るのでは、と、気を揉みましたが嬉しい事に危惧に終わりました。定刻が近づきますと、三々五々お集まり頂き三十数名のご参加となり孟宗竹の林が無くなってしまいました「文学碑」の前での恒例行事となっております献酒、献花、を無事に終了しました。

その後は、くすの木会館へ場所を移しまして、熊本朗読研究会のメンバーの方々による「太陽のない街」の一節「婦人部会」を朗読、つづいて「徳永直と自然について」のテーマで討論会となり活発な意見が交わされて、例年とは少し異なった今年の「孟宗忌」でしたが、ご出席の皆様には好評のようでした。

引きつづき偲ぶ会が開宴となりましたが、昨年の春、俄に持ち上がりました「文学碑」の移転問題、さらに夏には、「文学碑」の背景となり趣を添え「孟宗忌」の名の由来ともなっておりました孟宗竹がキレイに伐採されて唖然とさせられましたこと等、お集まりの皆様との話は尽きることなくて、あっと云う間の二時間余りが過ぎていました。

誘われるまま始めて「孟宗忌」へ参加致しました日は、朝から底冷えがし、積る程ではないが小雪が舞っていたのを思い出されます。あれから十、四、五年が過ぎ、現在地に事務所が開催されましたのを機に、少し許り事務局を手伝わせて頂いて三年、ようやく会員の皆様方とお顔馴染みになりました此の頃です。

新会員も少数ずつ乍ら増えつつある中で、これまで支えていらっしゃいました発足時からの会員の方々と唯一交流が出来ます「偲ぶ会」、皆様とお目にかかれますことを嬉しく、又、たのしみに致しております。折角お顔なじみになりましたのに、お姿が見受けられませんと、お加減が悪いのではないかと案じたり一喜一憂致します。

今後も「徳永直の会」が益々発展致しますように、また支えてくださる、会員の皆様方のお健やかな日々を心より祈っております。

次回の「孟宗忌」でお目にかかりましょう。

第二十五回孟宗忌へのメッセージ

二十世紀の悪の遺産～戦争・テロ・核兵器。人類を何度も破滅させることのできる兵器群を大量に保持する最大のテロ国家が、新世紀も世界を思いのままにしようとしています。わが政府は、これに追随するばかりです。

徳永直は、旧世紀・一九世紀の遺物に立ち向かい、新世紀二十世紀の夜明けをめざしました。しかし、遺物はしぶとく残りました。私たちは、徳永の夜明けへのメッセージを再生し、多くの人々に伝えなければなりません。

その時、徳永文学の発信地が、この国の文化的貧困を典型的に象徴した行為で、「外套」が剥ぎ取られたことに怒りを禁じ得ません。

徳永文学碑を創り出した孟宗忌に参集された人々と共に、遠くて近い私たちも孟宗竹の再生のために力を尽くします。

孟宗忌よ、蘇れ！

二〇〇二年二月十一日　（宮城県登米町）佐藤三千夫記念会

会　告

去る二〇〇二年一月二〇日、登米町の首藤コウさんが八三才で逝去されました。首藤コウさんは、徳永直と親密な交遊のあった首藤直一郎氏の夫人です。

一九五〇年代の佐藤三千夫顕彰運動から、佐藤三千夫記念碑建設と呑牛忌の中核であった直一郎氏と共に人生を歩まれました。直一郎氏亡き後も、佐藤三千夫記念会の運動と呑牛忌を支援して下さいました。

徳永直と深い関係のあった首藤コウさんを失ったことは、私たちにとって大きな損失です。私たちは、首藤コウさんの意志を受け継ぎ、今年も佐藤三千夫顕彰事業を成功させていきます。

二〇〇二年二月十一日　佐藤三千夫記念会

読書会のお知らせ

原則は第二土曜日午後二時から四時までです。五月は十一日で、「最初の記憶」の（二）からで、場所は画廊喫茶店隣さろん・ど・漱雲。六月は八日で「他人の中」を始めます。

事務局だより

▽春に会報を出すのは久しぶりである。会費が余ったわけではない。本来の姿に戻っただけである。

▽特別会員になっていただいた方には感謝！感謝！　もう幾人かの特別会員をお願いしたい。と同時に会費を納めていただく会員増を目ざしたい。

▽四月の読書会は、「くまもと漱石倶楽部」の総会及び行事と重なったので、翌四月十四日（日）の夜六時から開催。「最初の記憶」の（一）竹箸作りと竹箸売りの場面であった。参加者は五名と少なかったが、充実した会になった。「私」の「母」の厳しさと愛情に心打たれた。こんな作品が教科書に載らないから、現代の狂った親子関係が頻発するのだとの意見も出た。

▽徳永直の作品を教科書に載せよう。

熊本・徳永直の会　熊本市北千反畑町五―一三　さろん・ど・漱雲
〒八六〇―〇八五五　ＴＥＬ・ＦＡＸ〇九六―三四三―〇〇七二
郵便振替　〇一九四〇―二―一一四九八

印刷所　㈱昭和印刷　三四四―五二五一・三四三―三八八六